

した計算ミスが何カ所あったかを調べて1箇所につき1点(最高10点まで)をさらに減じた。このようにして算出した得点を期ごとに合計したものを基に、等質集団・異質集団合わせた16集団について期ごとのパーセンタイル値を算出した(表8を参照)。

問題解決課題は、(a) 10kgの液体、(b) バスは待ってくれない、(c) E・I社のそれぞれについて柳原(1976)と柳原(1982)による正解の解説に依拠して採点基準を作成した。(a)の問題は11の正しい手順を踏むことによって正解に達することができるので、集団の答えがどの手順まで進んでいるかによって、11点満点で採点した。(b)の問題は集団が作成した地図上のバス停、郵便ポスト、教会、橋など(歯医者を除く)14の目印のうちいくつが正しく記入されているかによって、14点満点で採点した。(c)の問題は7人の候補者のうち正解の1人を除く6人について記された不適格の理由が正しいものに1点ずつ与え、6点満点で採点した。こうして得られた16集団の得点は、問題ごとにパーセンタイル値に変換され、問題間で比較可能な成績指標として用いられた(後出の表9を参照)。

②課題への動機づけ

③凝集性(1): 集団への誘引

④凝集性(2): 集団のまとまり

⑤集団の雰囲気

これらうち初めの3つは、白樫(1978)が「集団討議に関する質問項目」と呼んだ12項目(いずれも5段階尺度)の因子分析から得られた変数

で、残りの1つは「集団雰囲気評定尺度」と呼んだ8対の形容詞から成るセマンティック・ディファレンシャル形式の質問項目(白樫は8段階尺度を用いたが、われわれは5段階尺度を用いた)から得られた。より詳細な説明は結果の項で行うであろう。

結果と考察

1. 集団の成績

乱数表の集計作業に従事した各集団の成績は表8に、問題解決課題に取り組んだ各集団の成績は表9に、いずれもパーセンタイル値で等質集団と異質集団に分けて期別に示されている。いずれの表も最下行に列の中央値が示されている。これをグラフに表したのが図4である。

乱数表の集計(図4(a))については、第1期で等質集団-異質集団間で $p=.10$ 水準の傾向差が認められたが、第2期、第3期と進むに従って成績の差は縮小している。他方、問題解決課題(図4(b))では、第1期に $p=.07$ 水準の異質集団<等質集団なる差を示していたものが、第2期で異質集団は等質集団に接近し、第3期ではこれを凌駕している(ただし、この差は $p>.10$: 検定はいずれもU-testによる)。第3期におけるこの差が有意水準に達しなかったことは、本実験の結果を解釈する上で明瞭さを欠くことになるが、第1実験の創造性検査の結果とも一致し、白樫(1978)の結果が本実験の第3期以降の状態を測定しているのだとすれば、これとも符合する。しかしながら、乱数表集計作業の成績に見られた第1実験との齟

表8 乱数表の集計作業の成績(%ile)

等質集団				異質集団			
Gr. I. D	第1期	第2期	第3期	Gr. I. D	第1期	第2期	第3期
g01	9.4	3.1	9.4	g17	78.1	90.6	96.9
g02	15.6	15.6	3.1	g18	21.9	28.1	28.1
g03	34.4	46.9	34.4	g19	28.1	21.9	15.6
g04	59.4	40.6	59.4	g20	3.1	9.4	21.9
g09	84.4	34.4	46.9	g25	96.9	84.4	90.6
g10	46.9	59.4	71.9	g26	71.9	71.9	40.6
g11	53.1	96.9	84.4	g27	90.6	78.1	65.6
g12	40.6	65.6	78.1	g28	65.6	53.1	53.1
中央値	43.8	43.8	53.2		68.8	62.5	46.9